

今井陽子

東京国立近代美術館工芸館では、夏季に子どもたちの来館を想定した展覧会と、それを主軸として組み立てた鑑賞促進のためのイベントを開催しています。もともとは子ども向け鑑賞プログラムだった「こども工芸館」を展覧会名に初めて適用したのは2005年のこと、07年にシリーズ化してからはほぼ毎年継続している試みです。別紙（東京国立近代美術館工芸館 夏季展覧会および関連印刷物等）に記載のとおり、このシリーズは名称に少しずつアレンジを加えながら展開しており、特に「おとな」との関係性は2度、3度と変化してきました。ここでいう「おとな」とは、当館来館者の過半数を占める「一般」層を指すとともに、展覧会の企画者自身が考える工芸理解のスタンダードでもありました。名称とそれに伴う設定の変遷は次とおりです：

2005年 「こども工芸館」 工芸の基礎知識を持たない子どもにも親しみやすいテーマ

2007年 「こども工芸館」／一般向けの別のテーマ 会場を分け、発達段階に応じた2本のテーマを併催

2010年 「こども工芸館／おとな工芸館」 単一のテーマを発達段階に応じたそれぞれの見方で楽しむことを提案

2014年 「こども+おとな工芸館」 単一のテーマを一緒に楽しむことを提案

2017年 「こども×おとな工芸館」 それぞれの視点が刺激となり、鑑賞の深化を期待

シリーズ名が徐々に変化していったのは、子どもたちの鑑賞が、当初期待していたイメージを遥かに超えたレベルに到達しうるのでと気づかされたからでした。子どもらしい自由でとらわれのない、時にその大胆さが大人の眉をひそめさせかねない言動さえ、作家の意図や工芸の根源を鋭く照射するまなざしが潜んでいるのです。彼らとの鑑賞体験は実にスリリングで、プログラム提供者である私たち自身の思考の見直しを迫るものでもありました。工芸の色彩は物質感と不可分であることを検証した2010年の「こども工芸館／おとな工芸館 イロ×イロ」展は、子どもたちの視点から得たインスピレーションが展覧会のテーマ自体を決定した一例です。



今回は、子どもたちが自身の鑑賞成果を絵と言葉で記したワークシート「工芸図鑑」、また実作品の触知のプロセスを含む「タッチ&トーク」の2つの事例を中心に、これまでに収集してきた子どもたちの鑑賞の様子を報告します。どちらのプログラムにおいても彼らは言語活動と同時に言外のさまざまなサイン—前者では筆圧、塗り重ね、細密描写とデフォルメ、あるいはトリミングとクローズアップ、また後者で発揮された皮膚感覚優位の仕草によって、直感した工芸の姿を生き生きと指し示してくれました。そうした行為の数々がきわめて合理的かつ合目的であることを確認しながら、子どもたちに刺激をもたらした工芸という事柄の意義と可能性を今後も探っていければと思います。